http://yahagigawa.jp

豊田市矢作川研究所 月報

◆足助の観光まちづくり
◆足助の植物
◆この素晴らしき世界 ～足助、山里の暮らし～
◆表紙の写真
◆～ 追悼・田中蕃さん～
組織の長はマルチ人間であれ

豊田市矢作川研究所
〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

2007.07 No.110

足助の観光まちづくり

鱸 雅守

足助といえば香嵐渓（こうらんけい）といわれるほど、紅葉の名所「香嵐渓」は近県ではよく知られるところです。昨今では、昨年の日経新聞の紅葉ランキングで奥入瀬（おいらせ）渓谷についで２位になり、全国的にもその名が知られるようになりました。事実、ここ数年、四国や九州からのツアーもたびたび訪れます。この紅葉の名所は、今から370年ほど前にスギやヒノキに加え、モミジの木を寺の境内や参道に植えた三栄和尚に始まります。明治に入ると近郷の村人の恰好の紅葉狩りの場となり、寺の名にちなんで香積寺（こうじゃくじ）のモミジと呼んで親しむようになりました。

足助は古くから三河・尾張と信州・美濃を結ぶ交易のまちとして、大いに賑わいを見せていました。しかし明治の終わり頃には中央線が全通し、物資の輸送はしだいに鉄道にとって代わられるようになりました。おそらくまちの賑わいに翳（かげ）りが見え始めたのではないかと思います。そこでまちの人々が考えたのは、飯盛（いいもり）山（やま）や巴川一帯を森林公園とすべく、スギやヒノキに代えてモミジやサクラを植栽し、登山道を整備して往来の賑わいを取り戻そうということでした。住民総出のモミジの植栽によって香嵐渓の原型が出来上がりました。香嵐渓の名称は昭和５年に命名されました。足助の観光まちづくりのすべての源がここにあると思います。

足助の町を飾る「たんころりん」

土びなに見入るオールドファン

時を隔て、高度成長が終わったとき、町は過疎化によって活力を失いつつありました。そのとき標榜したのが『保全を開発と信ずるまちづくり』でした。つまり、山を削ったり川を埋めたりして新しい産業を興すことより、今ある歴史や文化や自然をしっかり見据えて、新しい町の魅力を引き出していこうとするものです。それはモミジを一本一本植えて香嵐渓の風景を作り上げた精神に相通じるものです。

足助が行ってきた観光まちづくりの主な施策を時代的に眺めてみますと、昭和50年代の町並み保存、55年に三州足助屋敷の開館、60年代からのカタクリやシャガの山野草育成、平成２年の福祉センター百年草

オープン、同５年のまちおこしグループ・AT21倶楽部の立ち上げ、11年の中馬のおひなさんの開始、14年のたんころりんの開始などがあります。これらに共通することは、決して他所の物まねでないこと、保全を開発とする信条で足助の潜在する資源に深く根ざしていることです。ことに観光協会等民間機関や住民が主となって手がけてきたものは、資金はないけれど、時間と手間をかけて育ててきたものです。

すっかり早春の風物詩となったカタクリの花が咲く頃、２月～３月にかけて賑わう中馬のおひなさん。このイベントの良さは、古い町並みがバックにあること、昭和30年代半ば以降ほとんどお蔵入りをしてしまった土びなにスポットが当てられたこと、まちのおばあさんたちがすすんで店先や家の前で説明やもてなしをしていることなど、もともとその土壌に根付いていることのリメークで成り立っていることです。

合併後、足助は大きく変わろうとしています。変わってよくなることは勿論ですが、変わって悪くなることも少なくないと思います。あせらず急がず、どっしりと腰を据えて変わらないようで少しずつ変わっていく、そんな観光地でありたいと思います。

（すずき　まさもり、足助観光協会 事務局長）

足助の植物

北岡明彦

旧足助町は標高70～1,120m（寧比曽岳山頂）に及び、その地質は東部地区のみ変成岩であるほかは、ほぼ全域が花崗岩から成ります。

潜在自然植生としては、標高800m程度以上はブナ―ミズナラ林、標高500m程度以下はツブラジイ―アラカシ林、その間はモミ―シラカシ林などが成立していたと思われますが、人工林化や二次林化が進んだ結果、現在では各所の神社や尾根・岩石地などにわずかに痕跡が残るのみです。区域内に現存する植物群落としては、香嵐渓にある香積寺裏山のモミ―シラカシ林、田振町から下国谷町の巴川沿いにあるエドヒガン群落、御内町にある田之士里湿原（県指定自然環境保全地域）などが貴重なものです。

植物相からみると、寧比曽岳周辺にブナ・チチブドウダン・シコクスミレなど温帯性の植物がわずかに残ったり、西部地区を中心にヤマヒョウタンボク・イナモリソウ・キソキバナアキギリや暖帯性のコショウノキ・タブノキなどが北上して分布することなどが注目されます。また、紅葉やカタクリで有名な香嵐渓周辺は常に人為的に低木層が刈られることにより、特異な草本植物群落が発達します。春には、キクザキイチリンソウ・ヒメカンアオイ・ヒトリシズカなどが一斉に咲き、少し遅れてナベワリ・ウラシマソウ・フタリシズカなども咲きます。さらに、真夏から秋にかけては、キツネノカミソリ・ウバユリ・ハグロソウ・ヤマホトトギスなども次々と咲き、３月から９月にかけてはほとんど花が絶えることがありません。一方、山間地の田畑の土手や草刈り場に残っている植物も貴重で、フナバラソウ・ササユリ・スズサイコ・キキョウなどが目につきます。

キソキバナアキギリ

カタクリ

しかし、足助地区には東海丘陵要素植物（日本中で東海地方の湿地やその周辺に固有及び特徴的に多産又は隔離分布する植物）といわれる種類は非常に少なく、シデコブシやシラタマホシクサなどは見ることができません。

広大な足助地区ではまだ完全な植物調査が行われていませんので、今後調査が進めば、まだまだ多くの種類が見つけ出されるものと思われます。

（きたおか　あきひこ、豊田市森林課 主幹）

この素晴らしき世界 ～足助、山里の暮らし～

吉田　大

５月の下旬、野林町の田んぼでは、整然と植えられた苗が頼りなさげに風に吹かれています。車で通りすぎる速度では何も植えられていないと思うくらい、しばらくは雑草のない田の底の灰色が目立ちます。そして１ヶ月もすれば田んぼはふさふさとした緑の絨毯（じゅうたん）に変わります。爽やかな風に吹かれながらあぜ道に寝っ転がって、高く澄んだ青空を眺めていると、土の香りと、草の香りと、鳥の声と、風に揺れる木々と、呼吸し、体を休めている自分とが一体になっているように感じます。家の中にいると、稼ぎ仕事の雑多なことや、新聞報道から知る人間社会の憂鬱（ゆううつ）さにとらわれることが多いものですが、田んぼにいると不思議とそんなことはどこかに消え失せていて、知的生物でないことの気持ちよさを感じます。

僕は旧足助町の野林（豊田市野林町）に2004年の大晦日にＩターンで引っ越してきました。Ｉターンとはいうものの、僕は農業を始めようとしていたわけでも、百姓仕事に興味があったわけでもなく、緑豊かな場所が好きだったに過ぎません。

ところが、やってみると百姓仕事はとても楽しい仕事でした。そして次から次へとやらなきゃならないことが向こうからやってきます。サクラが咲いたら稲の種付け、五月晴れの頃は田植えの準備、梅雨が近づいたら田んぼに放す鴨の雛（ひな）の世話と田植え、梅雨が明けたら夏野菜がじゃんじゃん穫れて、秋になったら稲の収穫です。冬から春までは、薪を集めたり、鴨をさばいたり、家具を作ったり、敷地内で土方仕事をしたりと、年中休む暇がありません。それなのに、次から次へと自分でやってみたいことが増えてきます。足助に住むようになってからは、あれもしなきゃ、これもしなきゃ、でもこれもやりたいな、なんてことばかりです。

アイガモの泳ぐ田んぼ

暮らしの仕事とでもいえばいいのでしょうか。お金を稼ぐための仕事ではなくて、日々の暮らしをするために手足を使う仕事。そんな暮らしの仕事の楽しさと大切さを、僕は足助に住むようになって知りました。そして同時に、そんな仕事を通じて、自分自身が草木や動物たちと同じ世界に住む人間なんだということを感じるようになりました。そんなことを感じるようになってから、僕は、全ての人が自らの暮らしを自らの手足で創造する楽しさと大切さを知って、経済システムに組み込まれていない無機的でない自由自在な人として生きていくことができれば、どんなにか素晴らしいことかと思うようになりました。

（よしだ　だい）

表紙の写真

アジサイを訪れた
セマダラコガネ

町の中や雑木林など、どこでも見ることができる昆虫です。広葉樹をはじめ、いろいろな植物の葉を食べます。

2005年7月3日 豊田市国附町
（吉鶴靖則氏　撮影）

～追悼・田中蕃さん～

組織の長はマルチ人間であれ

新見幾男

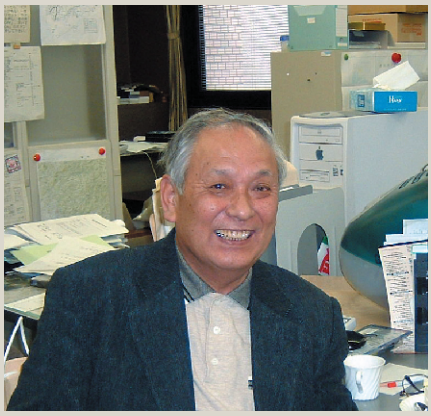
豊田市矢作川研究所の創設メンバーの１人であり、最近は同研究所の研究顧問だった田中蕃さんが、５月21日朝、加茂病院で亡くなった。膵臓癌が肝臓に転移していて、田中さんは自分の余命について医師から告知されていた。

愛知県ガンセンターに入院し、退院して自宅療養しておられる時期だったから、４月中旬のことだったと思うが、矢作新報社に来られ、ご自分の病状や医師の告知のことも話された。死の覚悟はできているが、残された時間が余りに短かいので、自分の仕事を整理できないのが残念ですと言っておられた。

田中さんは今年３月まで矢作川漁協の学識経験理事をしていて、理事退任後も豊田市森づくり委員会の委員や漁協の「環境漁協宣言」評価委員会の担当者の仕事を継続していただいていた。それらの仕事を引き継いでほしいと田中さんは言われ、私は了解した。

1993年、加藤正一市長（当時）の豊田市・枝下用水土地改良区・矢作川漁協の３団体は、第3セクター経営で「豊田市矢作川研究所」を設立することにし、研究部門を立ち上げ指揮する人として昆虫研究者の田中蕃さんを主任研究員に採用することで合意した。

翌1994（平成６）年７月、第３セクター経営の豊田市矢作川研究所がスタートした。研究所会長は鈴木公平豊田市助役（当時）が引き受け、副会長と監事は枝下用水土地改良区と矢作川漁協の理事長が交互に担当した。主任研究員の田中さんは、事務局長（漁協から出向）になった私や河川研究の仲間、市の関係部局の人々と共に研究事業や研究組織の形をつくっていった。



2003年3月　矢作川研究所にて

2003（平成15）年４月、第３セクター経営の豊田市矢作川研究所が市営研究所に変わると、田中さんと私は９年間の仕事を終え退任した。

田中さんは私より２歳上の1935（昭和10）年３月生まれだった。昆虫の生態研究が専門で『原色日本蝶類生態図鑑』（共著）などの専門書や多くの論文、エッセーを残した。矢作川天然アユ調査会や森の健康診断の調査研究にも参加し、矢作川への「砂利投入実験」を自ら主宰して河川土木の分野にも研究活動を拡げていった。環境社会学の視野からも河川環境を論じ得た人だった。

田中さんは研究生活では多芸多才のマルチ人間だった。研究所が将来的に視野のせまい専門家（いわゆる専門バカ）のモザイク組織になっていくことを一番怖れておられた。市役所が各部局のトップから担当者レベルまでタテ割り化されている現状を嘆いておられた。「組織の長たるものはマルチ人間であれ。」これが田中蕃さんの組織論の柱だったと思う。

（にいみ　いくお、矢作川漁業協同組合長）

後記

今回は昨年の合併で豊田市となった足助地区を取り上げました。今ある歴史や文化、自然を生かし、移り住んできた人を受け入れて町の活性化をはかる取り組みの先進性に敬服しました。これからも矢作川流域のユニークな地域おこしの事例を紹介していきたいと思います。（洲）